

甲状腺外科草子 118

古文復習：新古今の序と春

杉野 圭三

新古今和歌集は第八番目の勅撰和歌集で、後鳥羽院の院宣により撰者は源通具・六条有家・藤原定家・藤原家隆・飛鳥井雅経・寂蓮だが、寂蓮は死去、5人となった。



藤原定家

参考資料

新古今和歌集仮名序

大和歌は、むかし天地開けはじめて、人のしわざいまだ定まらざりし時、葦原中つ國の言の葉として、稻田姫、素鷲[すが]の里よりぞ伝はれりける。中略。これによりて、右衛門督源朝臣通具、大藏卿藤原朝臣有家、左近中将藤原朝臣定家、前上總介藤原朝臣家隆、左近少將藤原朝臣雅経らにおほせて、昔今時を分たず、高き賤しき人を嫌はず、目に見えぬ神仏の言の葉も、うばたまの夢に伝へたることまで、広く求め、普く集めしむ。中略。その上、みづから定め、手づから磨けることは、遠く唐の文の道を尋ねれば、浜千鳥跡ありといへども、わが国大和言の葉始まりてのち、呉竹の代々にかかるためしなんなかりける。後略。

序文は最も神経を遣う部分で、仮名序は藤原良経の執筆とされ、後鳥羽院が選定に関与したことも述べられている。撰者たちにとっては有難迷惑だったかもしれないが？

序文の後は従来通り各主題毎の編集である。

春歌

み吉野は山も霞て白雪のふりにし里に春は来にけり (1,撰政太政大臣=藤原良経)

岩そそく垂水の上のさわらびの萌え出づる春になりけるかな (32,志貴皇子)

万葉集の「いはばしる垂水の上のさわらびの萌え

出づる春になりけるかも」(万葉集八,1418)と比較すると「岩ばしる」の方が勢いを感じられる。春の夜の夢の浮橋とだえして峰に別るる横雲の空 (38,藤原定家)



梅の花にほひをうつす袖の上に軒もる月の影ぞあらそふ (44,藤原定家)

梅の花あかぬ色香も昔にておなじ形見の春の夜の月 (47,俊成女)

ながめつるけふは昔になりぬとも軒端の梅はわれを忘る (52,式子内親王)

冬が去り春を告げる梅の風情は格段である。薄く濃き野辺のみどりの若草に跡まで見ゆる雪のむら消え (76,宮内卿)

吉野山こそこのしをりの道変へてまだ見ぬ方の花を尋ねむ (86,西行法師)

風かよふ寝覚めの袖の花の香にかをる枕の春の夜の夢 (112,俊成女)

またや見む交野のみ野の桜狩花の雪散る春のあけぼの (114, 俊成)、藤原俊成 82 歳の歌。

花さそふ比良の山風吹きにけり漕ぎゆく舟の跡見ゆるまで (128, 宮内卿)

花さそふなごりを雲に吹きとめてしばしはにほへ春の山風 (145,藤原雅経)

花は散りその色となくながむればむなしき空に春雨ぞ降る (149, 式子内親王)

入集した歌人の最多は西行の 94 首、以下慈円、藤原良経、藤原俊成、式子内親王、藤原定家の順。女流歌人では、式子内親王 49 首、俊成女 29 首、宮内卿 15 首が選ばれている。

新古今和歌集は膨大であり、最初に読むのなら角川ソフィア文庫のビギナーズ・クラシック (小林大輔編) がお勧め! 所々にちりばめられたコラムや解説が分かり易く面白い。

(一甲状腺外科医の徒然なる随想)

2024年10月31日